小学校一年生の見た戦争（長岡空襲）

南 照（山谷町3）

中学校の教師だった南さんは、夏休み期間中の学校登校日にあたる八月十日に、長岡空襲の体験を教え子たちに聞かせたそうです。「戦後五十年、今でも苦しんでいる人がいるかと思うと、何かせつなくなります。当時の記憶力を考えると、私達が戦争体験を伝えられる最後の年代かもしれません。今の平和が多くの人たちの犠牲の上に成り立っていることをきちんと伝えたい」と話しています。

小学校一年生の記憶力とは、どのくらいのものでしょうか。昭和二十年八月一日、その前後のことはあまりよく憶えていませんが、その夜の長岡空襲のことは割と憶えています。余程、怖かったのだと思います。

それはとっても暑い日でした。

父は長岡機関区の機関士をしていました。この日は石打方面まで物資輸送列車に乗務していて留守でした。家には祖父母と母と五月に生まれたばかりの妹と私の五人、みんなで夕飯を終えて、祖父は土合の本家に用に行ったようでした。十時前後だったでしょうか、パラパラと雨の音がして、「こんなお天気なのにね」と話して寝ようとしていたら、本家から帰って来た祖父が大声で「空襲だ！」と叫びながら近所に声をかけ、「早く防空壕に入れ！」と怒鳴りました。軍需工場のある宮内方面の空が真っ赤になっていたそうです。中庭に掘ったちっぽけな防空壕に入りましたが、市の中心部から火に追われて大勢の人が山の方へ逃げて行くのを見て、私達も防空壕を出ました。

そんなに広くない道でしたが、四列でしょうか、五列でしょうか、道いっぱいに我れ先にと子供の名を呼び、怒声とも悲鳴ともつかぬ声を上げ、「阿修羅」のごとく形相を変えて押し寄せて来る人の波に、私は足がすくんで祖母の手にしがみつきました。ものすごく沢山ある戦争のむごたらしさ、悲惨さの中でも、死とはまた別の意味で生き地獄のような光景として、今でも脳裏から離れません。

翌朝、幸いにも焼けなかった本家の玄関先で、はぐれた祖父や母と会えた歓び、機関車をやっとの思いで長岡まで運転して戻った父がみんなの無事に流した涙、そんな父や母の姿を私はボンヤリ見ていたような気がします。母は百日足らずの妹を抱いて、橋の下で川の中に一晩中つかっていたそうです。母は五十八歳で亡くなりましたが、その橋は形こそ変わり、道路もよくなりましたが、今も川は流れていて、そこを通るたびに「母はここに居たんだなぁ」と思い出しては目頭を熱くしています。

家はきれいに焼け落ちて、何も残らず灰になっていました。もちろん防空壕もぺちゃんこになっていて、もしずーと入っていたら、父を残して五人は死んでいたでしょう。大きな家でおじいちゃん、おばあちゃんに可愛がられ、何不自由なく育っていたのが、一夜にして乞食同然になってしまったのです。浴衣一枚、ハダシで逃げたので、道路が熱くて歩けず、一番先に貰ったのは下駄でした。父たちは本家に、私と祖母は別の親戚の二階にやっかいになりました。行く所のない人は焼け跡に棒を立て、カヤを吊って生活していたようです。

八月一日、その一日だけでなく、その前後の辛さも一日や二日では語り尽くせない程あります。小学校一年生が雪道を冷たくて、泣きべそをかきながらズック靴で通ったこと、南京袋で洋服を作ってもらったこと、しらみ退治のこと、どの子もいつも同じものを着ていました。幸せな生活をメチャメチャにしてしまった戦争、大きくなるに従って本当に憎みました。まわりが豊かになると、私も自分の家が欲しいとか、服が欲しいとかという我がままが出て、母を困らせました。そして、家族みんなが心の面でも貧しくなっていました。父一人の働きでしたから、お金がなくなると父と母はよくケンカをしていましたから……、子供心にそれが一番いやなことでした。それでも母から毎月『少女』という雑誌を買ってもらえるのがとってもうれしくて、発売日に本屋に走って行った日のことを忘れません。

小さかったので、大人の人ほどの苦しみや悲しみはなかったかもしれませんが、今の平和が沢山の人の犠牲の上に成り立っていることを絶対に伝えていくべきです。平和のすばらしさ、美しさを知らせ、かわいい子供や孫がずーと幸せに暮らせる日本にしたいものです。

お買物、ご用命は市内で

デリカ家だより
人と環境に良いものを！
健康は自ら守る。── クロスタニン食品
肌を変える。── カツウラ化粧品
安眠を約束。── デビロン健康寝具。
女性の自立。女性経営者の相談に応じます。
新津特約店 デリカ家（ケンコートータルアドバイザー） 長崎屋店（24）7936 狭川店（25）2990

秋の生徒募集中
※お好きな曜日に週1回の授業。1週間同じ献立なので忙しい方でも都合のいい日に受講できます。
全国料理学校認可校 新津料理学校 滝谷町5の2 ☎22-5000

一冊の本から甦った私の戦争体験

中野道子（金津）

中野さんは旧制女学校二年生のとき、終戦を迎えました。「戦争で兄三人を失いましたが、当時の母の気持ちを考えると……。女性にとって、戦争で最愛の人や子供を失った苦しみや悲しみは計り知れません。ものすごくつらいものがあるでしょうね。今振り返ると、戦時中の母の姿が印象に残っています」と話す中野さん。

部屋の本棚には、五十年前の家族や自分のことを思い出させてくれた「桜島」の本がきちんと納められています。

「サキノ敵船団ハ　夜光虫ノ誤リナリ」

去る三月、私達の市読書会で、戦後五十年、戦争の苦しみ、悲しみが記憶から遠ざかるので、五十年を振り返りみる意義を考えて、「桜島」（梅崎春生著）が課題に取り上げられました。

この本のこの一行で驚きと共に、私の脳裏に鮮やかにこの夜のことが甦ってきました。私の故里である平塚は、広大な敷地を有する海軍火薬廠（注①）と航空会社があるため、連日の空襲で市街地一面焼け野原、通学にも何時も生きた心地のしない毎日でした。

敗戦の色濃い日々、その日も昼間から空襲警報（注②）が鳴り渡ると同時に、グラマン（注③）の急襲で、私の家でも庭に居た母が狙われ、阿鼻叫喚の一刻でした。

空襲も収まり、夕方長兄の会社より一報が入り、会社もグラマンの機銃掃射で多くの人が怪我したり、死んだり、兄も工場見回りしていて狙われ、一緒だった憲兵（注④）は即死、幸い兄は怪我で済みましたが、病院に収容されたとのこと。臨月を控えた兄嫁は行かれず、母が行きましたが、正に生き地獄で足の踏み場もないほどに、怪我人や死に逝く人達、特に学徒動員の生徒達の死は多くを見とったとか、私達に聞かせながら流した母の涙は忘れられません。

二、三日が過ぎ、夜半空襲警報と同時に、相模湾に敵前上陸との報道。私の父は十八年に亡くなっており、私のすぐ上の兄と弟、妹の四人、近所の人達はリヤカー等に身の回りの物を載せ、厚木街道を北へと逃げる人達が続きました。私達はどうすることもできず、ただ家の中を恐ろしさで泣きわめきながら、走り回っていました。外で様子を見ていた六兄が「いざとなったら町に入院している長兄や母と死ぬ時は一緒」と兄に言われたけど、死ぬ覚悟などできる筈もありません。

暫くして警報も解除となり、敵前上陸は誤報だったことが分かりました。それがこの「夜光虫ノ誤リナリ」です。八月一日のことです。

戦争は一生忘れることができませんし、再び繰り返してはなりません。当時の苦しみ、悲しみは私達の時代だけで沢山です。八月十五日の終戦日に大人達が流した涙、子供だった私達には「あー、これで空襲がなくて済む」と思い、ホッとしたものです。

戦後五十年、一冊の本で甦った戦争体験の一部です。

＊

（注）
①火薬廠　火薬工場のこと。
②グラマン　航空母艦から発着艦するアメリカ軍の小型爆撃機のこと。
③憲兵　もと、陸軍兵科の一つ。軍隊内の警察活動を担当し、行政司法の警察も兼ねたもの。

お買物、ご用命は市内で

駐車場のご案内 1.2番をご利用下さい 当店 長崎屋
COFFEE 銘菓 もか大福 涼味 水まんじゅう
ご慶弔式菓子 田家屋 月曜定休日
新津市本町四丁目 ☎&FAX 22-0430

あなたの安心を企画する
有限会社 樋口保険企画
安心 にいがたネットワーク
☎（0250）22－6774
営業事務所 新津市北上3丁目12番6号
ファクシミリ（0250）24－9110
本部 〒956 新津市金沢町3丁目7番20号